

ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における H. スペンサーの「怖れ」 批判をめぐって¹

北 夏子

1. はじめに

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) は、その青年期に、イギリスの思想家であるハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の著作の熱心な読者であったという²。そのせいか、ベルクソンは彼が記したほぼ全ての著作でスペンサーに言及し、場合によっては引用し、考察を加えている。本稿では、ベルクソンによる多くのスペンサー思想批判の中から、『意識に直接与えられたものについての試論』 (*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889. 以下、『試論』と略記。) の中の、スペンサーの著作『心理学原理』 (*The principles of psychology*, 1855.) の「怖れ」 (fear) を扱う箇所を取り上げる。これは、『試論』において、優美論³以外で、ベルクソンがスペンサーに直接言及しその考えを批判する箇所である。本稿の目的は、『試論』で言及されるスペンサーの思想とそれに対する批判の一事例としてこの箇所を扱い、両者の思想的関係の全体像を明らかにするための材料を提供することである。

2. 『試論』におけるスペンサーによる「怖れ」への言及

ベルクソンは、次に引用する箇所で、スペンサーの思想を用いて「怖れ」を論じている。本稿では、この箇所を、便宜的にスペンサーからの引用を含む第一文を①、第二文を②とし考察を加える。

「強い怖れ (frayeur intense) は叫び声や、隠れたり逃げたりする努力や、動悸や震えなどによって表現される」とハーバート・スペ

ンサーは言う(①)。私たちはさらに進んで、これらの運動は怖れそのものの一部をなすと主張したい。それらの運動によって、怖れは強さ(intensité)のさまざまな段階を通過しうる一つの情動(émotion)になるのだ(②)(括弧内補足引用者)。(DI,22/44)⁴

①については、ベルクソン自身がこの箇所が、『心理学原理』からの引用であると注で示している⁵ため、まず、『心理学原理』の当該箇所を検討する(本稿の3で論じる)。そこで、スペンサーはベルクソンがここで述べている通りのことを言っているのか、言わば文献的な根拠を明らかにする。この考察の目的は、ベルクソンによる引用を裏付けることである。

続く②では、「私たちはさらに進む」とされ、考察が続いていくが、ベルクソンのこの言い方では、スペンサーによる事実認識を正しいと認めるので進むのか、あるいは認めることができないので進むのか、つまりなぜさらに進むのかが読み取りにくい。言い換えれば、スペンサーの考えとベルクソンの解釈との関係が分かりにくい。そこで、②に対しては、①に対する分析の結果を踏まえつつ、『試論』における「怖れ」についての考察がもつ役割を検討することによって、考察することにする(本稿の4で論じる)。ここでの考察の目的は、スペンサーの思想とベルクソンの思想がどのような関係を結んでいるのか、明らかにすることである。

3. スペンサー『心理学原理』における「怖れ」について

ハーバート・スペンサーは『心理学原理』の中で「記憶」(memory) (PP,481)「予知」(prevision) (PP,481)、並びに「欲望」(desire) (PP,481)との関係を考察している⁶。その考察を進める中で、姿形が類似した二匹の動物を設定し、一方を獲物、もう一方を捕食する者(敵)として、二匹の関係を考察している⁷。同等な姿形をもつ獲物とその敵という枠組みを用いることによって、体の大きさや能力などの条件を抜きにした捕食における内的状態とその表現が考察されている。ここで、二匹の間に相互に生じる心的状態の、捕食される側の「怖れ」と、捕食する側の欲望について言及される⁸。この箇所に次の文章が続くのだが、この文章は、『試論』でベルクソンが扱っている箇所である

ため、そのまま引用する⁹。

怖れは、それが激しい時（when strong）、鳴き声、逃避の努力、動悸、震えにそれ自身表現される。また、これらはまさに、怖れられた悪の現実的苦しみ [= 怖れられた悪を現に受けること] に随伴する現れ（manifestation）である。破壊の情熱（destructive passion）は、筋肉系の一般的な緊張に、歯ぎしり及び蹄の突起部の軋みに、目及び鼻孔の広がり、唸り声に現れる。また、これらは、獲物の殺傷に伴う諸行為（the actions）のいっそう弱い諸形式である（括弧内補足引用者）^{10 11}。

この箇所では、激しい怖れと、破壊の情熱とが、獲物におけるそれと敵におけるそれとして対照的に扱われ、二匹に生じている心的状態と行為とが論じられている。捕食がまさに実現されようとするその時に捕食するもの・されるものにどのような相互的な表現が生じるかが考察されていると思われる。続く箇所では、上記で激しい「怖れ」と対照的に述べられていた「破壊の情熱」が、「怒り」（anger）とされる。

つぎのことは、だれでもひとりひとりが証言できる。すなわち、怖れと呼ばれる心的状態は、一定の痛みの結果の精神的諸表現から成り立つ、ということ。また、怒りと呼ばれる心的状態は、ある種の痛みを与える間に生じる諸行為と諸印象の精神的諸表現から成り立つ、ということ^{12 13}。

捕食者としてのその敵が抱く欲望が、捕食が現実化していくその過程で「破壊の情熱」「怒り」という概念で言い換えられていく。ここでは、現実となった行為によって生じた心的状態が扱われている。「怖れ」や「怒り」に関連づけられて示唆されるのは、経験とそれについての記憶との関係であるように思われる。

ベルクソンが引用したように、スペンサーは「怖れ」が「激しく」なることに触れており、「怖れ」が「運動」として表現されると述べていたのは間違いではない。ただ、スペンサーによる考察では、その激しさ

の程度が行為とどのような関係を結んでいるのかについて主に扱われているというわけではないと思われる。そうではなく、捕食をめぐる引き起こされる二匹の動物の心的状態及び行動と、先に述べた「記憶」「予知」、並びに「欲望」との関係の考察が主であるように思われる。

本稿の2で①に対して立てた問いには、スペンサーは、ベルクソンが引用文で述べていることと類似したことを述べている、と答えることができる。同一ではなく類似とするのは、ベルクソンが *intense* とする語は、スペンサーでは *when strong* の言葉で表現されているからである。続く4では、②を検討するが、その際にはベルクソンによる訳語の選択の理由についても考察することになる。

4. ベルクソンによるスペンサーの「怖れ」批判について

続いて、②を考察するために、『試論』におけるこの「怖れ」が扱われている文章の役割を確認する。ベルクソンは「怖れ」を含む「激しい情動」について考察する直前で、「注意と緊張」を考察している。この「注意と緊張」についての考察を扱い、「激しい情動」が論じられる理由を確認する。

してみれば、ここに至って私たちは、心の深い感情の強さ

(*intensité*)と同様に、表面の努力の強さを定義したことになる。

どちらの場合にも、質的進展と、ぼんやり統覚されながら増大する複合性とがある。だが、意識は空間において考えることに慣れ、その考えたものを自分自身に話すのに慣れているから、感情をただの一語によって指し示し、努力をそれが有用な結果を生み出すまさにその一点に局在化してしまうだろう。そのとき、意識は、努力をいつも自分自身に同一にとどまりながら、意識によって指定された場所で大きくなるものとして統覚し、また感情を〈名前を変えないまま、その性質も変えずに大きくなるもの〉として統覚するのである。(DI, 19-20/40)

表面的な努力にも、心の深い感情にも、質的な進展と複合性の増大がみられるのだが、私たちはその質的なものを、空間の内で思考し、言葉に

よって表現するため、その質的なものを空間にあうように間違えて捉えてしまう。このような錯誤が、表面の努力や深い感情に挟まれた「中間状態」を捉える時にも見られる、と、ベルクソンは、次のように、述べている。

私たちがこうした意識の錯覚を表面の努力と深い感情との中間状態のうちにも見いだすようになるのは、まず確かである。実際、大多数の心理状態は筋肉収縮と末梢感覚を伴っている (*accompagner*) のだ。これら表面の諸要素が相互に整えられるのは、純粋に思弁的な観念によることもあれば、実践的な次元での表象

(*représentation*) によることもある。前者の場合、知的努力あるいは注意が働く。後者の場合、激しいとか鋭いとか呼びうるようなさまざまな情動、例えば怒り、怖れ (*frayeur*) や、また多彩なくつつかの喜び、苦しみ、情念、また欲望などが生じる。強さ

(*intensité*) の定義がこれらの中間状態にも適合することを手短かに示すことにしよう。(DI, 20/40-41)

筋肉収縮と末梢感覚を伴う心理状態の一つに、激しいとか鋭いとか呼びうるようなさまざまな情動があり、それは実践的な次元の表象によって秩序づけられていると述べられている。そして、激しい情動の強さと筋肉の緊張との関係について以下のように述べられていく。

ところで、注意の努力と、激しい欲望やたけり狂った怒り、熱烈な恋や激越な憎しみといった心の緊張の努力と呼びうるようなものとのあいだに、本質的な差異は見られない。これらの状態の各々は、一つの観念によって整えられる筋肉収縮の一体系に帰着すると思われるからだ。ただ、注意の場合、その観念は認識についての多かれ少なかれ反省的な観念であり、情動の場合、行動についての非反省的な観念である。したがって、これら激しい情動の強さ

(*intensité*) は、これらの伴う筋肉の緊張に他ならないはずである。(DI, 21/42-43)

ベルクソンはこのように述べて、激しい情動を分析していく。この考察を進めるにあたって、ベルクソンはダーウィンによる「憤怒」(fureur)についての生理学的な観察記録や、ジェームズによるこの「憤怒」についての考察を扱う。「憤怒」や「怒り」を考察した後、ベルクソンは「怖れ」(frayeur)を考察するためにスペンサーを扱う。スペンサーについて考察したその後で、ベルクソンは次のように述べている。

したがって、強さ(intensité)という観点から言えば、私たちがこの研究の最初に述べた深い感情と、いま検討してきた鋭くないし激しい情動との間には、何ら本質的な差異はない。愛や憎しみや欲望が強さを増すと言うことは、それらが外部へ投射され、表面へ放射状に拡がり、末梢的な感覚が内的な諸要素にとって代わると言明するに等しい。しかし、これらの感情の強さ(intensité)は、表面のものであれ深いものであれ、激しいものであれ反省されたものであれ、意識がそこにぼんやりと見分ける単純な諸状態の数の多さから常に成り立つのである。(DI23/45)

本稿の2で扱ったスペンサーからの引用箇所と、3で扱ったその周辺箇所を分析すると、ベルクソンが強さ(intensité)に繰り返し言及していることに気づく。スペンサーの「怖れ」についての考えを扱ったのも、「怖れ」が「強い」すなわち「激しい」ものになると、その「怖れ」は「隠れたり逃げたりするための努力や、動悸や震えなど」の身体的な表現を伴うとスペンサーが述べていたからなのではないか。すなわち、スペンサーではstrongという語が、運動と関連づけられて用いられていることにベルクソンは注目したのではないか。ベルクソンは程度そのものを示す「強さ」と、スペンサーが用いた捕食者との関係から見た表現の大きさを示唆する「強い」という語とを、敢えて区別せずに用いているように見える。「私たちはさらに進んで、これらの運動は怖れそのものの一部をなすと主張したい。それらの運動によって、怖れは強さのさまざまな段階を通過しうる一つの情動になるのだ」というベルクソンの主張は、スペンサーの「強さ」を「強さ」(intensité)として引き受けることで、ベルクソン自身の考えに連続させその一部にしてしまっ

いるように見える。ベルクソンの引用の仕方は、運動は「怖れそのもの」の一部をなすというベルクソン自身の考えをより分かりやすく示すために有効に働いていると言えるだろう。つまりここには、スペンサーからベルクソンに引き継がれた論点があり連続性がある、と言える。

しかし、先で述べたように、スペンサーは、心的状態と運動との間には表現の関係があると考えている。ベルクソンは、心身の全体において不可分なものとして生じる現象としての情動というベルクソン独自の考え方を提示する。また、スペンサーには、方法として、一つの事象を説明する際、段階ごとに概念を変えて説明し、観察される事実にとどまろうとする傾向が見られる。しかし、ベルクソンには、観察される事実を踏み越えて考察をすすめる傾向が見られる。ここには、スペンサーとベルクソンとの思想的な断絶を見てとることもできる。

本稿の2の②に対する問い、スペンサーの思想とベルクソンの思想はどういった関係を結んでいるか、については、スペンサーからベルクソンに引き継がれた論点があり、両者には連続性が見られるが、ベルクソンが自分の新しい考えを提示しているという意味で断絶も見てとることができる、と答えることができる。ただ、この連続も断絶も、ベルクソンによって行われた意図的な選択に基づいていると言わざるを得ない。

5. おわりに

本稿は、ベルクソンの『試論』第1章の「怖れ」について論じられる箇所を扱い、スペンサーの著作からの引用とそれに対して展開されるベルクソンの主張とを考察した。私たちは、スペンサーが『心理学原理』で「怖れ」を論じ、激しい時には身体的運動として表出されると述べていることを確認した。すなわち、ベルクソンによる引用はある程度は正確になされていると思われる。また、「怖れ」を論じたスペンサーの意図と『試論』の議論とを考察した結果、スペンサーとベルクソンとは、連続する面と断絶する面があることが確認された。ただ、この結論もベルクソンによる意図的な選択に基づいて出される結論である。

本稿で行った分析の範囲では、両者の関係は、スペンサーはベルクソンの哲学の一部をなしているという関係にある¹⁴。

凡例

- 1) 引用するベルクソンのテキストは、P.U.F.の *Quadrige* 版に拠る。引用文には、その末尾に、参考文献表に示した書名の略記号とページ数を示した。また、引用するに際し使用した邦訳のページ数をその後に併記した。邦訳については必要に応じて部分的に変えたところもある。
- 2) 引用するスペンサーのテキストは、*Otto Zeller* の版に拠り、書名の略記号と頁数を必要に応じて示した。

註

- 1 本稿は、筆者が2015年度に筑波大学に提出した博士論文「ベルクソン哲学に対するH.スペンサーの影響の研究」の第五章で論じたテーマを考察し直したものである。大幅に加筆修正したが、一部重複していることを記しておく。
- 2 「昔私は一つの学説だけは例外だと考えていて、おそらくそのために私はごく若い頃それを信奉していた。スペンサーの哲学は事物そのままの型をとって事実の細部にもびたりとはまることを目標としていた。もちろんそれはまだ漠然とした普遍概念に支持点を求めていた。私はたしかに『第一原理』の弱点を感じていた。しかしこの弱点は、著作の準備が不十分なために力学の「究極観念」を探ることができなかつたためだと私は考えた。私はスペンサーの研究のこの部分を取りあげ直してそれを補足し強固にしようとした。私は力の及ぶかぎりそれを試みた。そうして私は時間の観念にぶつかった。そこに思いもかけないことが私を待ちかまえていた。」(PM, 2/12)
- 3 『試論』では、優美が考察される箇所でも、スペンサーの思想が扱われている。この優美論とスペンサーの思想との関係については、「ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における優美について」『哲学・思想論集』、第43号、筑波大学大学院人文社会科学研究所、2018年、pp.95-114、を参照。
- 4 原文は以下の通り。“«Une frayeur intense, dit Herbert Spencer, s’exprime par des cris, des efforts pour se cacher ou s’échapper, des palpitations et du tremblement.» Nous allons plus loin, et nous soutenons que ces mouvements font partie de la frayeur même: par eux la frayeur devient une émotion, susceptible de passer par des degrés différents d’intensité.”
- 5 *Principes de psychologie* の一巻、523頁からの引用であると記されている。
- 6 『心理学原理』中の、“The feelings”というタイトルが付けられている第8章の§213。
- 7 PP, 481-482.
- 8 PP, 482.
- 9 スペンサーの著作からの引用については、多くの方々から助言をいただき、北が訳した。
- 10 スペンサーによる原文は次の通り。“Fear, when strong, expresses itself in cries, in efforts to escape, in palpitations, in tremblings; and these are just the manifestations that go along with an actual suffering of the evil feared. The destructive passion is shown in a general tension of the muscular system, in gnashing of teeth and protrusion of the claws, in dilated eyes and nostrils, in growls; and these are weaker forms of the actions that accompany the killing of prey”, PP, 482-483.
- 11 参考資料として仏訳もつける。“La crainte, quand elle est forte, se traduit par des cris, des efforts pour se cacher et fuir, des palpitations et des tremblements; et ce sont là justement les manifestations qui accompagneraient une expérience actuelle du mal qu’on craint. Les passions qui tendent à détruire se manifestent par

une tension générale du système musculaire, un grincement des dents, un avancement des griffes, une dilatation des yeux et des narines, des grognements; et c'est là, sous une forme affaiblie, ce qui accompagne l'acte de mettre à mort une proie.”この訳では、fear を crainte としている。ベルクソン による仏訳では、frayeur となっており、ベルクソンが参照したのは別の仏訳である可能性がある。ベルクソン自身の訳である可能性もある。また、strong を、Ribot 他訳では forte、『試論』では intense としているという違いもある。 *Principes de psychologie.*, Tomel, trad. sur la nouv. éd. anglaise par Th. Ribot et A. Espinas, Paris: Librairie Germer Baillière et C^{ie}, 1875, p. 523. テキストは Internet archive の電子テキストを参照した。1892 年 F.Alcan 発行のテキストについても、Gallica の電子テキストを用い参照した。

12 “Every one can testify that the psychical state called fear, consists of mental representations of certain painful results; and that the one called anger, consists of mental representations of the actions and impressions which would occur while inflicting some kind of pain”, PP, 483.

13 “Chacun peut témoigner que l'état psychique que nous appelons peur résulte de la représentation mentale de certains états pénibles; que celui que nous appelons colère résulte de la représentation des actions et impressions qui se produiraient si nous infligions châtement sur châtement, —en d'autres termes, que ces passions sont des excitations partielles des états impliqués dans l'acte de recevoir ou d'infliger du mal”, *Ibid.*, p.523.

14 引用について言えば、『試論』のスペンサーに直接言及した箇所には、現在の研究倫理に求められているような厳密さは見られない。ベルクソンによる引用の仕方は、ベルクソンが生きた時代における研究に対する考え方に基づいてなされている可能性もある。

参考文献

DI: Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.

(邦訳『時間と自由』中村文郎訳、東京：岩波書店、2001年。)

PM: Henri Bergson, *La pensée et le mouvant*, 1934. (邦訳『思想と動くもの』河野与一訳、東京：岩波書店、1998年。)

PP: Herbert Spencer, *The Principles of Psychology*, 2vols., *The Works of Herbert Spencer*, Osnabrück: Otto Zeller, 1966.

Herbert Spencer, *Principes de psychologie*, Tomel, trad. sur la nouv. éd. anglaise par Th. Ribot et A. Espinas, Paris: Librairie Germer Baillière et C^{ie}, 1875.

Herbert Spencer, *Principes de psychologie*, Tomel, trad. sur la nouv. éd. anglaise par Th. Ribot et A. Espinas, Paris: F.Alcan, 1892.

北夏子「ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における優美について」『哲学・思想論集』、第43号、筑波大学大学院人文社会科学部研究科、2018年、pp.95-114。

(きた・なつこ 筑波大学人文社会系特任研究員)